ARTIST SUPPORT

【アーティストサポート】を通して、アーティストたちの活動をご支援いただき、ありがとうございます。
時や国を超え「生きる力」を与えてくれる文化・芸術に、引き続きのご支援をお願い申し上げます。

ご支援をいただいた個人ならびに企業・団体の皆さま

＜2023年度年間サポート＞

F.A　Y.A　T.I　井上 豊　今井良成　S.U　植原由起子　S.U　M.E　A.O　K.O　S.O　片山由美子
河村はるみ　K.K　木村美明　M.K　小室秀夫　N.S　新貝康司　N.S　M.S　関根一禄　A.D　土屋涼子
トゥルーラブ真智子　トゥルーラブ真凛　N.N　中島 和　中野和枝　中村尚義　中村美穂　T.H　N.H　M.H
平山美由紀　藤野盾臣　細沼康子　M.H　松尾芳樹　松田 香　真野美千代　三橋祐太　J.M　H.M　H.Y　S.Y　渡部伸子
TDK株式会社　MEDIHEAL & SEKIDO　コンツェルトハウス・ジャパン by 株式会社キタマ
株式会社ソーシャルキャピタルマネジメント　株式会社ロジックアンドエモーション
ライフプラン株式会社　Heart of the Earth株式会社
ナレッジワーカーズインスティテュート株式会社　株式会社RINABO　きづきアセット株式会社
株式会社青林堂　日本パデレフスキ協会淡路
（匿名希望 26名）

＜ショパン・ピリオド楽器プロジェクト＞

S.O　北村眞　トゥルーラブ真智子　平山美由紀
（匿名希望 4名）

＜舘野泉バースデープロジェクト＞

Y.A　阿部将任・登美子　新井京子　池田光世　一柳吉子　A.I　遠藤一秀　大嶋早苗　大嶋浩美
大谷恵美子　S.O　奥田三華　小畑裕子　木全恵美子　久保春代　M.K　黒川智恵美　黒住彰子
斉藤久子　坂井和　佐々木暁子　菅原佳世子　鈴木早苗　R.T　田口雅子　田邉英利子　土谷美保子
永作稔　中村恭子　中村康江　K.H　羽生賢次　林雄嗣・鈴子　福島晶子　堀田高秀　松田純子
三上美智恵　光永育　K.M　山家七恵　S.Y　K.Y　吉岡玲子　吉田和充・淳子
舘野泉ファンクラブ東京　舘野泉ファンクラブ東北　タビオラの会　日本セヴラック協会　有限会社ムジカーザ
NPO法人 Mプロジェクト　スオミ・ピアノ・スクール研究会
（匿名希望 20名）

＜ニュークラシックプロジェクト＞

淺岡尚子　岩井睦雄　上原啓子　小田島容子　K.K　久保千聖　雲然祥子　小池美喜　篠崎啓史　I.S　T.S
トゥルーラブ真智子　トゥルーラブ真凛　T.N　長谷部 宏行　秦 勝重　T.H　林 路郎　細沼康子　牧野佳那
松下泰之（マティビ）　S.Y
（匿名希望 14名）

2024年1月20日現在　敬称略

ご支援についての詳しい内容は、どうぞ下記へお問い合わせください。
株式会社ジャパン・アーツ アーティストサポート係 Tel.03-3499-7720
（平日11:00～17:00 年末年始を除く）

アーティストサポートの詳細はこちらをご覧ください。→

樫本大進＜プレミアム室内楽シリーズ＞ vol.2
シューマン&ブラームス 全曲ヴァイオリン・ソナタ・チクルス vol.2

樫本大進 & エリック・ル・サージュ

Daishin Kashimoto & Eric Le Sage

2024年2月4日（日） 14:00 開演
サントリーホール
2:00p.m. Sunday, February 4, 2024 at Suntory Hall

主催：ジャパン・アーツ
協力：ソニー・ミュージックジャパン インターナショナル

Program

ブラームス：ヴァイオリン・ソナタ 第1番 ト長調 Op.78「雨の歌」
J. Brahms: Violin Sonata No.1 in G major, Op.78

第1楽章：ヴィヴァーチェ・マ・ノン・トロッポ	1st Mov.: Vivace ma non troppo
第2楽章：アダージョ	2nd Mov.: Adagio
第3楽章：アレグロ・モルト・モデラート	3rd Mov.: Allegro molto moderato

ブラームス、ディートリッヒ、シューマン：F.A.E.ソナタ イ短調
J. Brahms / A. Dietrich / R. Schumann: F-A-E Sonata in A minor

第1楽章：アレグロ	1st Mov.: Allegro
第2楽章：間奏曲、動きをもって、しかし速くなりすぎずに	2nd Mov.: Intermezzo. Bewegt, doch nicht zu schnell
第3楽章：スケルツォ、アレグロ	3rd Mov.: Scherzo. Allegro
第4楽章：フィナーレ、はっきりと、かなり活発なテンポで	4th Mov.: Finale. Markirtes, ziemlich lebhaftes Tempo

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

クララ・シューマン：3つのロマンス Op.22
C. Schumann: Three Romances, Op.22

第1曲 変ニ長調 アンダンテ・モルト	No.1 in D-flat major, Andante molto
第2曲 ト短調 アレグレット、優しい語り口で	No.2 in G minor, Allegretto. Mit zartem Vortrage
第3曲 変ロ長調 情熱的に、速く	No.3 in B-flat major, Leidenschaftlich schnell

シューマン：ヴァイオリン・ソナタ 第2番 ニ短調 Op.121
R. Schumann: Violin Sonata No.2 in D minor, Op. 121

第1楽章：かなりゆっくりと ― 生き生きと	1st Mov.: Ziemlich langsam – Lebhaft
第2楽章：きわめて生き生きと	2nd Mov.: Sehr lebhaft
第3楽章：静かに、単純に	3rd Mov.: Leise, einfach
第4楽章：動きをもって	4th Mov.: Bewegt

樫本大進&エリック・ル・サージュ 2024 日本公演

1月27日(土)	北九州	北九州市立響ホール	主催：(公財)北九州市芸術文化振興財団 共催：北九州市、(一財)福岡県退職教職員協会
1月28日(日)	所　沢	所沢市民文化センターミューズ	主催：(公財)所沢市文化振興事業団
1月31日(水)	大　阪	住友生命いずみホール	主催：住友生命いずみホール [(一財)住友生命福祉文化財団]
2月2日(金)	静　岡	静岡音楽館AOI	主催：静岡音楽館AOI 指定管理者 (公財)静岡市文化振興財団
2月3日(土)	横　浜	横浜みなとみらいホール	主催：神奈川芸術協会
2月4日(日)	東　京	サントリーホール	主催：ジャパン・アーツ

Profile

© Keita Osada (Ossa Mondo A&D)

樫本 大進（ヴァイオリン）
Daishin Kashimoto, Violin

ロンドン生まれ。1990年、第4回バッハ・ジュニア音楽コンクールでの第1位を皮切りに、1996年のフリッツ・クライスラー、ロン＝ティボーの両国際音楽コンクールでの第1位など、5つの権威ある国際コンクールにて優勝。

3歳よりヴァイオリンを恵藤久美子に学ぶ。5歳でNYに転居し、7歳でジュリアード音楽院プレカレッジに入学、田中直子に師事。11歳の時、名教授ザハール・ブロンに招かれリューベックに留学。20歳よりフライブルク音楽院でライナー・クスマウルに師事、グスタフ・シェック賞を受賞し修士課程を修了した。

これまで、ロリン・マゼール、小澤征爾、マリス・ヤンソンス、チョン・ミョンフン、パーヴォ・ヤルヴィなどの著名指揮者のもと、国内外のオーケストラと共演を重ねるほか、室内楽にも意欲的に取り組み、マルタ・アルゲリッチ、ギドン・クレーメル、ユーリ・バシュメット、ミッシャ・マイスキー、エマニュエル・パユ、ポール・メイエなどの著名ソリストと共演。使用楽器は、株式会社クリスコ（志村晶代表取締役）から貸与された1744年製デル・ジェス「ド・ベリオ」。

2007年からは、自身が音楽監督となって兵庫県赤穂市・姫路市を舞台に室内楽の国際音楽祭「ル・ポン（Le Pont）」を開始。フランス語で「架け橋」の意を持つ名前を冠した本音楽祭は、「音楽を架け橋に、人と人のきずなを大切にし、平和で幸せな世界を創りたい」という樫本の願いを受けて開催され、彼の声がけで世界一流の音楽家が毎秋参加し話題を呼んでいる。

2010年、日本人として史上2人目のベルリン・フィルハーモニー管弦楽団第1コンサートマスターに正式就任。オーケストラの顔として活動しているほか、本拠地ベルリンでの定期演奏会やヨーロッパ、アジア・ツアーでの演奏会などでソリストとしても共演している。

2023年、細川俊夫より捧げられた委嘱新作：ヴァイオリン協奏曲《祈る人》を、パーヴォ・ヤルヴィ指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団と世界初演し、同年夏にセバスティアン・ヴァイグレ指揮読売日本交響楽団と日本初演を行った。

主なCDは、2014年にワーナー・クラシックスから世界リリースもされた、コンスタンチン・リフシッツとの「ベートーヴェン：ヴァイオリン・ソナタ全集」など。

1995年アリオン音楽賞、1997年出光音楽賞、モービル音楽賞、1998年新日鉄音楽賞フレッシュアーチスト賞、平成9年度芸術選奨文部大臣新人賞、2011年兵庫県文化賞、チェンジメーカー2011クリエーター部門、2017年姫路市芸術文化大賞、ドイツに於いてはシュタインゲンベルガー賞、ダヴィドフ賞を受賞。2019年12月より、HiFiオーディオ製品ブランド「VELVET SOUND」（旭化成エレクトロニクス）公式アンバサダー。

TBS「情熱大陸」、NHK「プロフェッショナル～仕事の流儀」など、多くのメディアに取り上げられ、クラシック音楽の最高峰で活躍するヴァイオリニストとして常に注目を浴びている。

Profile

エリック・ル・サージュ（ピアノ）

Eric Le Sage, Piano

フレンチ・ピアニズムの継承者として知られるエリック・ル・サージュは、繊細で趣のある音色、構成のセンス、詩的なフレージングで聴衆を魅了し続けている。

南仏のエクサン・プロヴァンス生まれ。パリ国立高等音楽院を17歳で卒業後、ロンドンでマリア・クルチオに師事。1985年ポルト市国際コンクールおよび1989年ロベルト・シューマン国際コンクール第1位、1990年リーズ国際ピアノ・コンクール第3位などの受賞歴を持つ。

ウィグモア・ホール、フィルハーモニー・ド・パリ、シャンゼリゼ劇場、アムステルダム・コンセルトヘボウ、フランクフルト・アルテ・オーパー、ベルリン・フィルハーモニー、ブリュッセルのパレ・デ・ボザール、カーネギーホール、サントリーホールを含む著名コンサートホールでリサイタルおよび室内楽を行うほか、ロサンゼルス・フィル、フィラデルフィア管、トロント響、シュトゥットガルト放送響、ドレスデン・フィル、ベルリン・コンツェルトハウス管、トゥールーズ・キャピトル国立管、ロイヤル・スコティッシュ・ナショナル管、ヨーロッパ室内管、ミュンヘン室内管、ロッテルダム・フィル、エーテボリ響、読響、都響を含む数々のオーケストラや、エド・デ・ワールト、ステファヌ・ドゥネーヴ、ファビアン・ガベル、ミシェル・プラッソン、山田和樹、サー・サイモン・ラトル、ヤニック・ネゼ=セガンをはじめとする著名指揮者と共演。また、シューベルティアーデ、エディンバラ国際フェスティバル、ラ・ロック・ダンテロン国際ピアノ音楽祭等の国際音楽祭に招かれ出演している。

室内楽の名手としても名高く、エマニュエル・パユ（フルート）、ポール・メイエ（クラリネット）、樫本大進（ヴァイオリン）、リーズ・ベルトー（ヴィオラ）、フランソワ・サルク（チェロ）、エベーヌ弦楽四重奏団、レ・ヴァン・フランセ（木管アンサンブル）といったトップ奏者たちと共演を重ねている。また1993年にメイエ、パユ等と共にサロン・ド・プロヴァンス国際室内楽音楽祭を創設し、芸術監督を務めている。

シューマンのピアノ曲・室内楽作品全集（2010年ドイツ・レコード批評家賞受賞）、プーランク、フォーレ、ブラームスの室内楽作品全集、ベートーヴェン「最後の3つのソナタ」、ユリアン・プレガルディエンとの「シューマン：詩人の恋」をはじめとする多数のCDをリリース。2022年にはソニー・クラシカルから1860〜1946年のフランス作曲家によるピアノ小品集「空中庭園」をリリースした。

フライブルク音楽大学教授。

Program Notes

柴田 克彦（音楽評論家）
Katsuhiko Shibata

ブラームス：ヴァイオリン・ソナタ 第1番 ト長調 Op.78「雨の歌」

ドイツ・ロマン派の代表格2人のヴァイオリン・ソナタ全曲チクルスの第2回。まずはヨハネス・ブラームス（1833−97）が残した3つのソナタの内、最初の作が披露される。この曲は、1879年に南オーストリア・ヴェルター湖畔のペルチャッハで、77年の交響曲第2番、78年のヴァイオリン協奏曲に続いて完成された。自己批判が強い彼は複数のソナタを破棄したといわれており、第1番といえども46歳の年に書かれた円熟の作である。

本作は、第3楽章で自作の歌曲「雨の歌」の旋律が使われたことから、この愛称（本人の命名ではない）で呼ばれている。曲は、ペルチャッハでの先行2曲同様、現地の空気感を反映した明るさと、ブラームス特有の寂しげな抒情性を併せ持ち、「雨の歌」に関連した主題を全楽章で用いることによって、有機的な統一が図られている。ちなみに「雨の歌」は、雨の日の気分をうたった1873年作の歌曲で、クララ・シューマンが好んだ曲でもある。

第1楽章： ヴィヴァーチェ・マ・ノン・トロッポ。甘美で憧憬を秘めた第1主題と、より歌謡的な第2主題を軸に展開。

第2楽章： アダージョ。民謡風の旋律を中心とした憂愁の歌が続く、変ホ長調の緩徐楽章。途中は葬送行進曲調に変化し、烈しさを加える。

第3楽章： アレグロ・モルト・モデラート。冒頭の「雨の歌」の主題（ト短調）に、2つの副主題をまじえた流麗な終曲。

ブラームス、ディートリッヒ、シューマン：F.A.E.ソナタ イ短調

1853年9月30日、20歳のブラームスは、名ヴァイオリン奏者ヨアヒムの紹介で、デュッセルドルフのシューマン宅を訪問。その地に5週間も滞在し、それが飛躍のきっかけにも、恩人の妻クララへの思慕の情の端緒にもなった。そして10月27日、ヨアヒムが当地で演奏会を行い、シューマン宅を訪れることになった。そこでシューマンは彼を歓迎するためのヴァイオリン・ソナタの合作を企画。第3楽章をブラームス、第1楽章を弟子のアルベルト・ディートリッヒ（1829−1908）、第2、第4楽章をシューマンが作曲して生まれたのが本作である。この曲は、翌28日にヨアヒムとクララのピアノで演奏され、ヨアヒムは全ての作曲者を当てたといわれている。しかし直後にシューマンは、他の楽章を自作に替えた新ソナタ（第3番）を完成。またブラームス作のスケルツォは先に単独で出版された、なお、後者は演奏機会も多いが、オリジナル全曲版の生演奏はかなり珍しい。何れにせよこれは、本チクルスの全要素を集約した作品でもある。

曲はもちろん、情熱や力感や幻想味を併せ持つ、ドイツ・ロマン派らしい音楽。「F.A.E.」はヨアヒムのモットー「Frei aber einsam=自由だが孤独に」の頭文字を意味し、各楽章はF・A・E（ヘ・イ・ホ）音を基本動機としている。

第1楽章：アレグロ。哀切な主題を中心に運ばれる情熱的でロマンティックな音楽。
第2楽章：間奏曲、動きをもって、しかし速くなりすぎずに。切なさが漂う、ヘ長調の美しく短い楽章。
第3楽章：スケルツォ、アレグロ。「タタタ・ター」のいわゆる「運命動機」を用いたハ短調の激しい主部に、柔らかく内省的な中間部が挟まれる。
第4楽章：フィナーレ、はっきりと、かなり活発なテンポで。対照的な2つの主題に様々な動きが加わる力強い終曲。

クララ・シューマン：3つのロマンス Op.22

シューマンの妻クララ（1819−96）は、当時最高クラスのピアニストとして活躍したが、作曲家としても幼くして才能を発揮した。だが、女性作曲家が認められなかった時代ゆえに、37歳の頃創作をやめ、奏者及び教師にほぼ専念した。とはいえ、それ相応の作品を残しており、近年は見直しが図られている。

彼女の作品の中でも演奏される機会が多いこの曲は、1853年の作。ヨアヒムのヴァイオリンと自身のピアノで初演され、ヨアヒムに献呈されている。すなわち前曲「F.A.E.ソナタ」と同年、シューマン夫妻が幸福だった最後の時期（夫は翌年ライン河に身を投げ、精神病院に収容される）の所産である。曲は、1849年に夫が彼女にプレゼントした同名曲がモデルともいわれる幻想的な小品集で、可憐な美しさを湛えた温かく流麗な音楽が続く。

第1曲：アンダンテ・モルト、変ニ長調。
第2曲：アレグレット、優しい語り口で、ト短調。
第3曲：情熱的に、速く、変ロ長調。

シューマン：ヴァイオリン・ソナタ 第2番 ニ短調 Op.121

ロベルト・シューマン（1810−56）は、1851年に生涯初めて2曲のヴァイオリン・ソナタを完成した。きっかけとなったのは友人のヴァイオリン奏者ダーヴィトの勧めで、第1番は同年9月、この第2番は10月26日〜11月2日に短期間で作曲された。なおこれは、デュッセルドルフ市の音楽監督就任2年目、投身自殺を図る3年前という創作活動終盤の時期にあたる。

この曲は、第1番よりも規模を拡大させた、抒情的かつ情熱的な快作。憂愁の念や力強さも有するロマンティックな音楽だ。なお試奏したヨアヒムは「感情の驚くべき統一性と主題の意義から、現代で最も優れた作品のひとつ」と賞賛。本作はシューマンの同分野の代表曲となった。

特徴的なのは、第1楽章の第1主題が、ダーヴィト（DAVID）の名前からとられたD-A-F-Dの音型＝音名象徴である点。さらにニ（D）短調の調性も、頭文字に拠るとされている。また第3楽章は、コラール「深き苦しみの淵からわれ汝を呼ぶ」に基づく変奏曲となっている。

第1楽章：かなりゆっくりと−生き生きと。序奏もD-A-F-Dに基づき、主部の冒頭でその動きが明確に出される。第2主題はなだらかな旋律。シンコペーションと転調の多用も際立つ。
第2楽章：きわめて生き生きと。2つの中間部をもつロ短調のスケルツォ。
第3楽章：静かに、単純に。ピッツィカートで奏されるト長調の主題と4つの変奏。夜想曲風の第4変奏が美しい。
第4楽章：動きをもって。細かく動く第1主題と落ち着いた第2主題を軸に進み、ニ長調で輝かしく終結する。